

昭和十年

警視廳防疫年鑑

警視廳衛生部

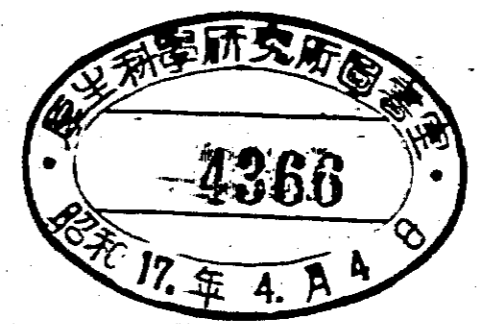
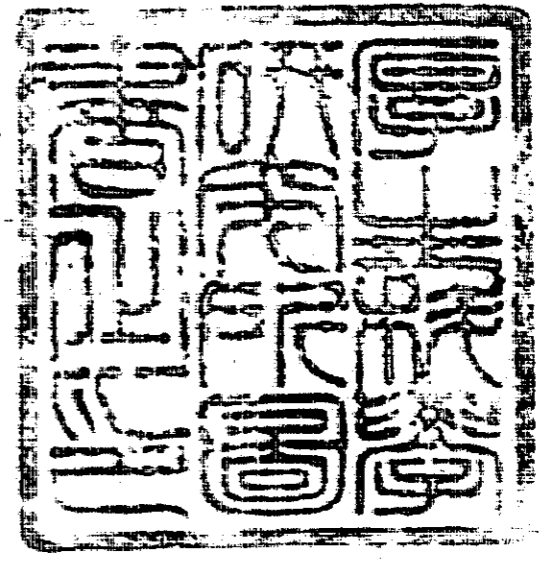
国立保健医療科学院蔵書



10012056

P
BB 10

P-B
A BB 10
8



目次

第一章 傳染病流行ノ狀況	一頁
第一節 總說	一
最近十箇年各種傳染病患者發生數	四
最近十箇年各種傳染病死亡者數	五
(統計圖譜五葉)	
第二節 赤痢 (疫痢及疑似症ヲ含ム)	七
一、一般狀況	七
二、季節別觀察	一三
三、區郡別觀察	一三
四、年齡及性別觀察	一四
五、患者診定ノ時期及病床經過	一五
六、死亡率	一六
七、其ノ他	一七

統計

第一表 最近十箇年發生患者及人口對比……………一八

第二表 患者發生月別……………一九

第三表 患者發生區郡別……………二〇

第四表 人口一萬ニ對スル患者發生區郡別……………二三

第五表 警察署別患者數及人口對比……………二六

第六表ノ一 患者年齡性別……………三二

第六表ノ二 十歳以下ノ赤痢患者年齡細別……………三三

第六表ノ三 疫痢患者ノミノ年齡別……………三四

第七表 死亡者年齡性別……………三五

第八表 疫痢死亡者ノミノ年齡別……………三六

第九表 患者死亡率……………三七

第十表 死亡數並死亡率區郡別……………三八

第十一表 患者發見方法別……………四一

第十二表 患者決定方法別……………四二

第十三表 一家ヨリ二名以上ノ患者發生……………四二

第十四表ノ一 療養場所別……………四三

第十四表ノ二 病院治療ト自宅治療ノ割合及死亡率比較……………四三

第十五表ノ一 自發病至初診期間(赤痢)……………四四

第十五表ノ二 同 右(疫痢)……………四五

第十五表ノ三 自發病至決定期間(赤痢)……………四六

第十五表ノ四 同 右(疫痢)……………四七

第十五表ノ五 自發病至轉歸期間(赤痢)……………四八

第十五表ノ六 同 右(疫痢)……………四九

第三節 腸「チフス」及「バラチフス」……………五一

一、一般狀況……………五一

二、區郡別觀察……………五一

三、季節別觀察……………五二

四、年齡及性別觀察……………五二

五、患者發見方法……………五三

六、患者診定方法	五三
七、患者診定ノ時期及病床經過	五四
八、死亡率	五六
九、其ノ他	五六

統計

第一表 最近十箇年患死者數及人口對比	五七
第二表 患者發生區郡別	五八
第三表 人口一萬ニ對スル患者發生區郡別	六一
第四表 警察署別患者數及人口對比(昭和十年)	六四
第五表 患者發生月別	六九
第六表ノ一 患者年齡性別	七〇
第六表ノ二 死亡者年齡性別	七一
第七表 患者發見方法別	七二
第八表 患者決定方法別	七三
第九表 患者死亡率	七四

第十表ノ一 療養場所別	七五
第十表ノ二 病院治療ト自宅治療ノ割合及死亡率比較	七六
第十一表 死亡數並死亡率區郡別	七七
第十二表 患家ノ使用水	八〇
第十三表 一家ヨリ二名以上ノ患者發生	八一
第十四表ノ一 腸「チフス」自發病至初診期間	八二
第十四表ノ二 腸「チフス」自發病至決定期間	八三
第十四表ノ三 腸「チフス」自發病至轉歸期間	八四
第十五表ノ一 「バラチフス」自發病至初診期間	八五
第十五表ノ二 「バラチフス」自發病至決定期間	八六
第十五表ノ三 「バラチフス」自發病至轉歸期間	八七
第四節 猩紅熱	八九
一、一般狀況	八九
二、區郡別觀察	九〇
三、季節別觀察	九〇

四、年齡及性別觀察.....	九一
五、患者診定ノ時期及病床經過.....	九二
六、死亡率.....	九三
七、其ノ他.....	九三

統計

第一表 最近十箇年患死者數及人口對比.....	九四
第二表ノ一 人口一萬ニ對スル患者發生區郡別.....	九五
第二表ノ二 昭和十年發生患者警察署別並人口對比.....	九八
第三表 患者發生月別.....	一〇三
第四表ノ一 患者年齡性別.....	一〇四
第四表ノ二 二十歳以下ノ年齡細別.....	一〇五
第五表 一家ヨリ二名以上ノ患者發生.....	一〇七
第六表 死亡者數及死亡率累年比較.....	一〇七
第七表 死亡者ノ年齡性別及死亡率.....	一〇八
第八表 患者發見方法別.....	一〇九

第九表ノ一 自發病至初診期間(全治者).....	一一〇
第九表ノ二 自發病至決定期間.....	一一一
第九表ノ三 自發病至轉歸期間.....	一一二

第五節 「チフテリア」

一、一般狀況.....	一一三
二、區郡別觀察.....	一一三
三、季節別觀察.....	一一四
四、年齡及性別觀察.....	一一四
五、患者診定ノ時期及病床經過.....	一一五
六、死亡率.....	一一七
七、其ノ他.....	一一八

統計

第一表 最近十箇年患死者數及人口對比.....	一二九
第二表ノ一 人口一萬ニ對スル患者發生區郡別.....	一二〇
第二表ノ二 昭和十年發生患者警察署別並人口對比.....	一二三

第三表	患者發生月別	一二八
第四表ノ一	患者年齡性別	一二九
第四表ノ二	人口一萬ニ對スル十歳以下ト十一歳以上ニ區分シタル罹患率	一三〇
第五表	患者決定方法別	一三一
第六表ノ一	死亡者數及死亡率累年比較	一三一
第六表ノ二	死亡率區郡別	一三二
第七表	年齡性別死亡率	一三五
第八表	療養場所別竝死亡率	一三六
第九表	患者發見方法別	一三七
第十表	一家ヨリ二名以上ノ患者發生	一三八
第十一表ノ一	自發病至初診期間	一三九
第十一表ノ二	自發病至決定期間	一四〇
第十一表ノ三	自發病至轉歸期間	一四一
第六節	流行性腦脊髓膜炎、發疹「チフス」其ノ他	一四三
第一、	流行性腦脊髓膜炎	一四三

統計

第一表	患者發生月別及死亡率	一四四
第二表	患者性別年齡別	一四五
第二、	發疹「チフス」	一四六
第三、	流行性腦炎	一四八

第二章 豫防施設ノ概要

第七節	赤痢及腸「チフス」(「バラチフス」ヲ含ム)ノ豫防	一五一
一、	豫防知識ノ普及啓發	一五一
二、	檢病的調査	一五五
三、	死體檢案	一五六
四、	膽汁培養基ノ利用	一五七
五、	野菜及牡蠣ノ取扱改善	一五八
六、	豆腐屋ノ改善	一五九
七、	菓子ノ取扱改善	一六〇
八、	井戸ノ構造改善	一六〇

九、上水道ニ對スル措置……………一六一

十、蠅ノ驅除……………一六二

十一、庖厨改善……………一六三

十二、便所及下水道ノ改善……………一六四

十三、保菌者檢索……………一六四

十四、腸「チフス」豫防注射……………一六八

十五、^{赤痢}疫痢内服「ワクチン」ノ應用……………一七一

第八節 「チフテリア」及猩紅熱ノ豫防……………一七六

一、豫防知識ノ普及啓發……………一七六

二、保菌者檢索……………一七七

三、「チフテリア」豫防注射……………一七七

第九節 其ノ他ノ防疫施設……………一七九

一、流行性腦脊髄膜炎ノ豫防……………一七九

二、「ペスト」豫防……………一八〇

三、發疹「チフス」豫防……………一八一

四、麻疹血清ノ製造分與……………一八二

五、流行性腦炎……………一八三

六、「デング」熱……………一八四

七、防疫關係諸營業及傳染病院ノ取締……………一八四

第三章 宮内關係防疫事務……………一八六

滿洲國皇帝御來訪關係防疫事務……………一八八

昭和十年警視廳防疫年鑑

第一章 傳染病流行ノ狀況

第一節 總 說

大正十二年ニ於ケル關東大震災火災ノ餘殃トシテ一時管下ニ流行蔓延シタル「腸チフス」ハ善後施設ニ依リテ鎮靜シ専ラ衰頹ノ一路ヲ辿レルモ、之ニ代リ昭和二年ヨリ俄然赤痢患者増騰シテ各病ノ首位ヲ占ムルニ至リ爾來年ト共ニ愈々熾烈ヲ加ヘ、未ダ底止スル所ヲ知ラザル如キ狀勢ヲ呈セリ、「チフテリア」猩紅熱亦其ノ頃ヨリ患者數ヲ激増シ、暫ラクハ此三病相競テ年々患者ヲ増發シ居リシガ、「チフテリア」ノミハ昭和八年ヲ最高トシ爾來豫防注射ノ普及ト共ニ漸次頹勢ヲ告グルニ至レリ、結局大正末年ニハ各病合計ノ患者數一萬一千六百餘名ナリシモノガ躍進的增加ヲ以テ、昭和五年ニハ二萬名ヲ越ヘ一昨八年ハ遂ニ三萬名ヲ突破シ本年ハ三萬五百七十七名ヲ算スルニ至レリ、而シテ其ノ半數ハ赤痢（疑似症ヲ含ム）ニシテ他ノ一半ハ主トシテ猩紅熱、「チフテリア」及腸「チフス」ノ三病ニテ之ヲ擔ヘリ。之ヲ人口一萬對患者發生率ヲ以テ觀ルトキハ、震災ノ影響アリシ大正十二年及十三年ハ例外トシテ之

ヲ問ハズ其ノ前後ハ概ネ萬對比二七・内外ニ留マリシヲ昭和二年ヨリ頓ニ上昇シ、遂ニ八年ニハ五〇・九六ノ高率記録ヲ貽シタリ、然ルニ本年ハ四八・四五ニシテ之ヨリ稍低キモ昨年ニ比スレバ〇・六八ノ上昇ヲ示セリ。

前記本年ノ患者ヲ病類別ニスレバ赤痢(疑似症ヲ含ム)一萬六千九百五十七名、「腸チフス」二千四百三名、「バラチフス」三百八十六名、乃チ消化器系ニ於テ一萬九千七百四十六名ヲ占メ、猩紅熱五千六百三名、「デフテリア」五千四十名、流行性腦脊髓膜炎百七十二名、發疹「チフス」十六名ニシテ痘瘡ノ發生ハ無ク結局呼吸器系其ノ他ニ於テ一萬八百三十一名ヲ算セリ。又之ガ發生率ヲ全國平均ト對比スルトキハ赤痢、猩紅熱及「デフテリア」ノ三病ガ特ニ管内ニ於テ異常ノ高率ニアルコトヲ認メラル。

次ニ累年ノ傳染病死亡數ニ就テ觀ルトキハ、十年前迄ハ年々三千内外ヲ普通トセシニ患者數ノ増加ニ伴ヒテ死亡數亦昭和三年ヨリ五千臺ニ上レリ、然レドモ昭和八年ノ六千名突破ヲ例外トスルノ他ハ爾來毎年五千乃至五千四百名ノ間ニ止マリ、其ノ人口萬對死亡比例ハ本年八・一七ニシテ恰モ大正十一年頃ノ率ニ比肩セリ、要スルニ人口對患者數ハ近年著シク増騰セリト雖モ人口對死亡數ハ之ニ反シテ寧ロ減少ノ傾向ニアリ。

更ニ臨床上、前記多發三病ト誤認セラレ易キ所謂類似疾患ノ死亡數ニ就テ調査スルニ、是亦人口増加ニ逆比例シテ近時年々死亡實數ヲ減少シツ、アリ、以上ノ事實ヲ參酌シテ管下ニ於ケル傳染病多發ノ動向ヲ觀察スレバ、現代經濟機構ニ基ク人口ノ甚シキ都市集中モ無論其ノ一因子トスル所ナリト雖、亦多年ニ亘ル各種施設ニ酬ヒラレテ、良ク民衆ノ衛生知識向上シ搗テ、加フルニ、公營救療機關ノ整備ニ伴ヒ、診療ニ對スル信頼及經費ノ低廉ト相俟ツテ、患者ノ届出ヲ著シク促進シタルニ影響スル所甚ダ大ナリト認メラル。

要スルニ現下ノ患者多發現象ハ、従前ニアリテハ病床輕微或ハ隱蔽ノ爲ニ放置サレ居タル程度ノモノガ、今日陸續届出ラレ之ガ累積シタルニ外ナラズシテ、現ニ患者隱蔽ノ弊廢レ、病毒ノ蔓延ヲ防止シ、豫防救治ノ實績ヲ收メツ、アルコトハ、畢竟現行防疫施設ノ效果ニ歸セザルベカラズ。

然レドモ、帝都ニ於ケル衛生設備ハ、舊來ノ市域ニシテ今猶改善成ラズ、況ヤ人口ノ膨脹日ニ月ニ顯著ヲ加フル現狀ニ當面シ、吾ガ防疫事務ノ重責愈々加ハルコトヲ痛感スル切ナリ。

以下章節ヲ追フテ各病流行ノ狀況ト之ガ豫防施設ノ概要ヲ輯録シ、以テ將來ニ於ケル防疫事務ノ參考ニ貽サントス。

尙管下ニ發生スル赤痢中「アメーバ赤痢」ハ甚ダ稀ニシテ年々十名ヲ出デズ、亦近年「眼及中耳ノデフテリア」ノ届出ラル、モノアルモ共ニ年中數例ニ過ギザルヲ以テ本編ニハ之ガ論及ヲ略ス。

最近十箇年各種傳染病患者發生數

(警視廳管内)

年次	病名	總數		計	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年
		對比分	前十年均年											
昭和元年	「ペスト」	1	0.00	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
昭和元年	「コレラ」	1	0.04	3	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
昭和元年	赤痢	3,263	46.16	107,388	16,957	15,104	11,563	10,947	11,041	9,473	8,271	6,203	3,263	3,263
昭和元年	「腸チフス」	5,357	19.88	36,966	2,000	2,710	3,203	4,194	5,839	3,943	4,159	3,966	3,263	3,263
昭和元年	「バチフス」	53	2.03	4,843	386	564	506	606	593	478	380	455	403	53
昭和元年	痘疹	5	0.07	149	1	3	3	1	1	1	3	7	1	5
昭和元年	「發疹チフス」	1	0.00	17	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
昭和元年	猩紅熱	1,077	14.04	34,033	5,603	5,889	4,985	3,828	3,233	2,667	2,496	2,592	1,776	1,077
昭和元年	「ゲリア」	1,456	16.66	37,169	5,040	5,339	6,066	4,228	3,871	2,561	3,437	2,999	2,272	1,456
昭和元年	流行性腦脊髄膜炎	7	0.03	67	1	1	1	1	1	1	1	1	1	7
計		11,662		33,777	25,017	23,126	20,000	18,000	17,000	15,000	14,000	12,000	10,000	100,000

赤痢中ニ疑似症及疫痢ヲ含ム
* 印ハ疑似症ヲ示ス

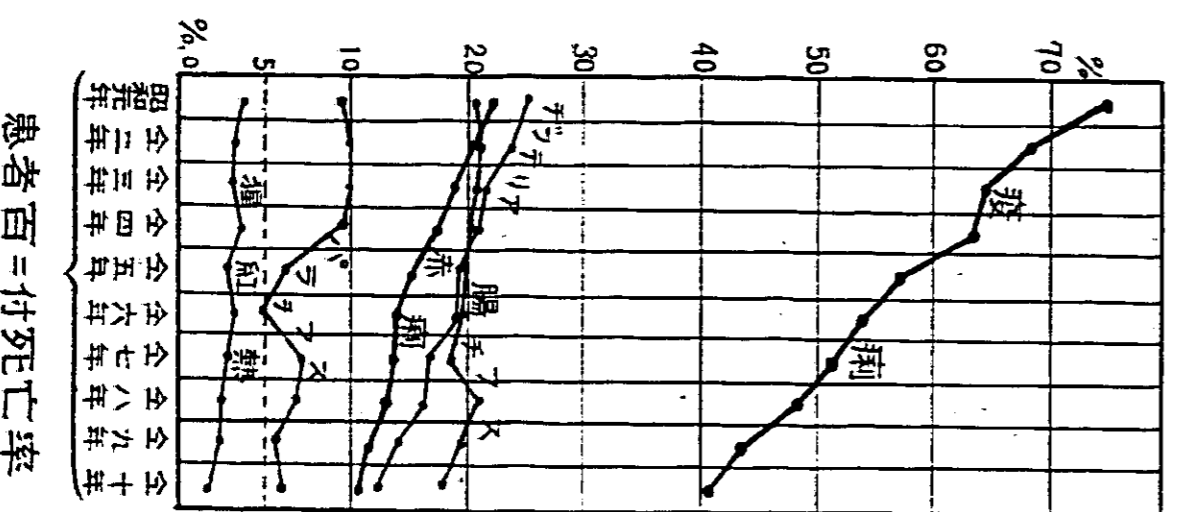
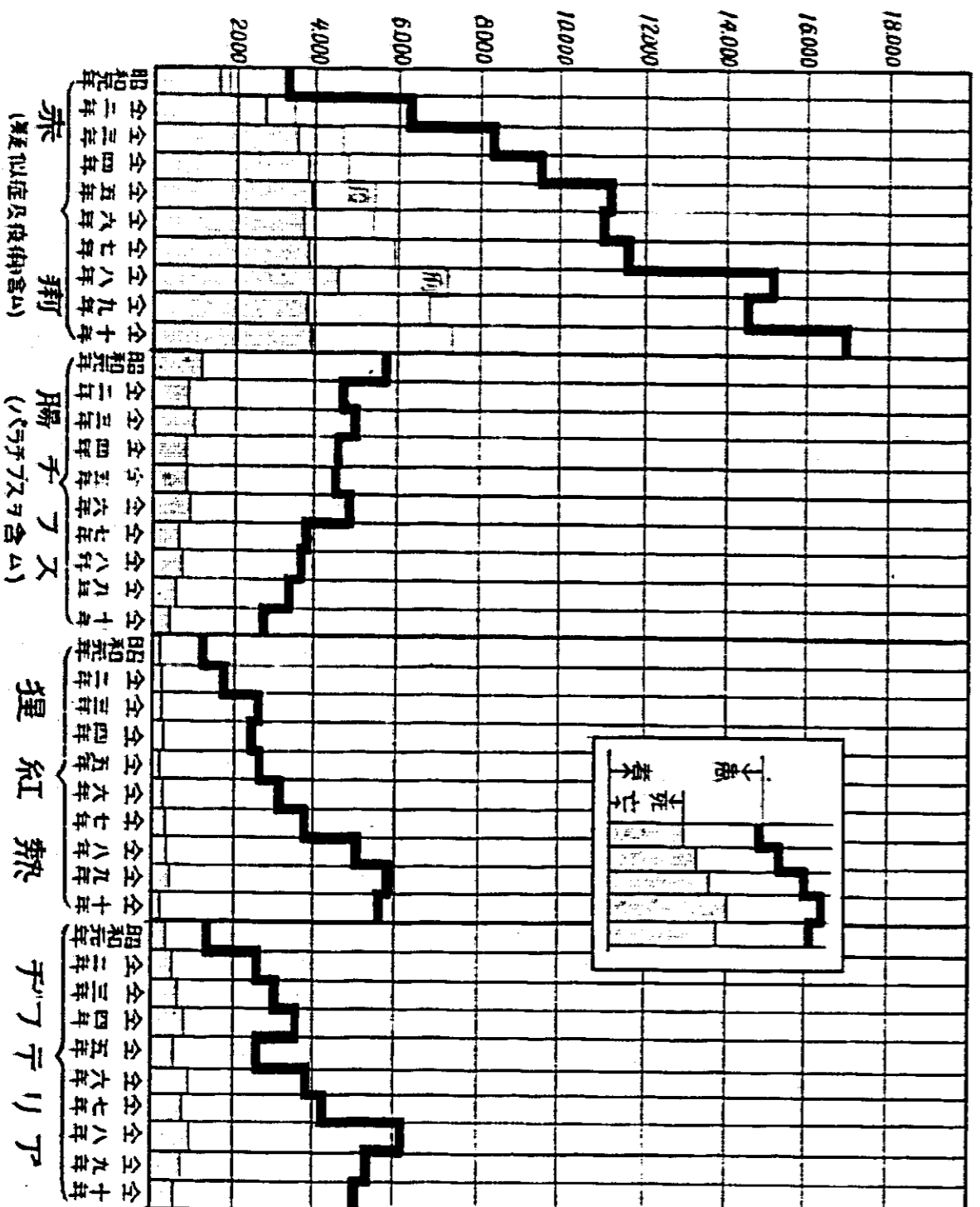
最近十箇年各種傳染病死亡者數

(警視廳管内)

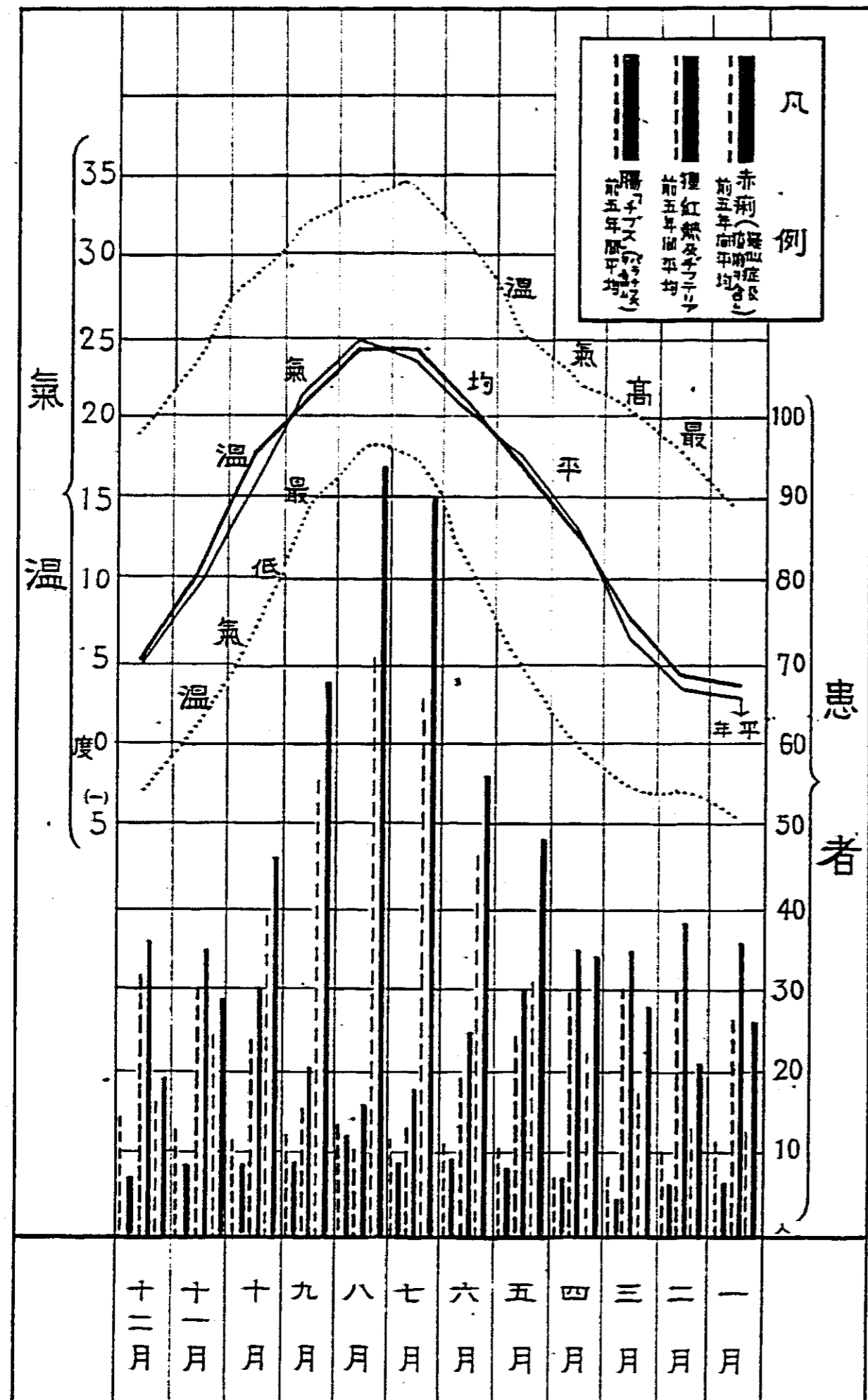
年次	病名	總數		計	昭和元年	昭和二年	昭和三年	昭和四年	昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	昭和十年
		對比分	前十年均年											
昭和元年	「ペスト」	1	0.01	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
昭和元年	「コレラ」	1	0.01	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
昭和元年	赤痢	1,655	23.51	51,155	3,910	3,733	4,458	3,787	3,658	3,945	3,719	3,493	2,810	1,655
昭和元年	「腸チフス」	1,098	16.48	37,121	700	515	674	582	800	711	845	831	831	1,098
昭和元年	「バチフス」	48	0.74	3,500	33	31	35	42	29	33	42	40	48	48
昭和元年	痘疹	1	0.06	27	1	3	1	1	1	3	1	1	1	1
昭和元年	「發疹チフス」	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
昭和元年	猩紅熱	80	1.85	999	133	146	127	125	108	86	100	86	60	80
昭和元年	「ゲリア」	332	3.79	6,404	605	690	998	683	777	499	709	629	533	332
昭和元年	流行性腦脊髄膜炎	50	1.01	533	85	64	42	34	35	44	48	53	50	50
計		3,333		50,751	25,157	23,126	20,000	18,000	17,000	15,000	14,000	12,000	10,000	100,000

赤痢中ニ疑似症及疫痢ヲ含ム

傳染病患死者數及死亡率



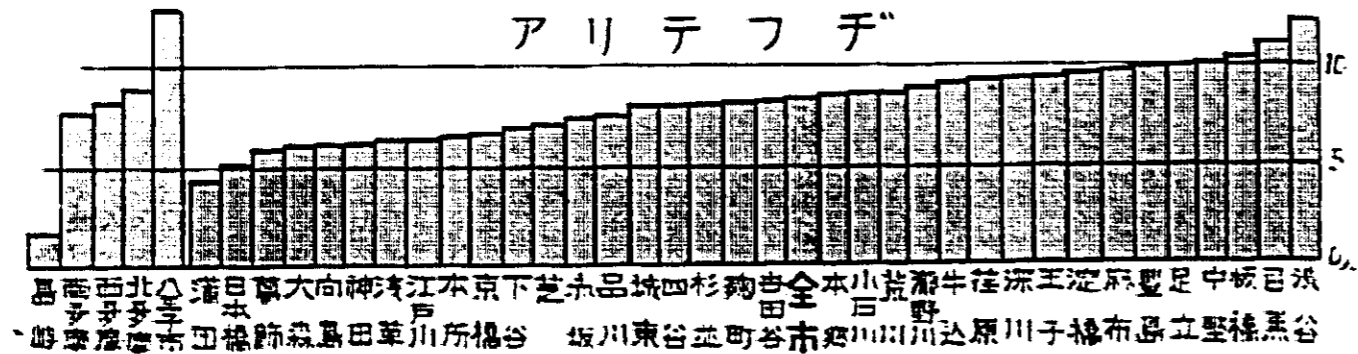
別月温氣及數者患生發日一均平



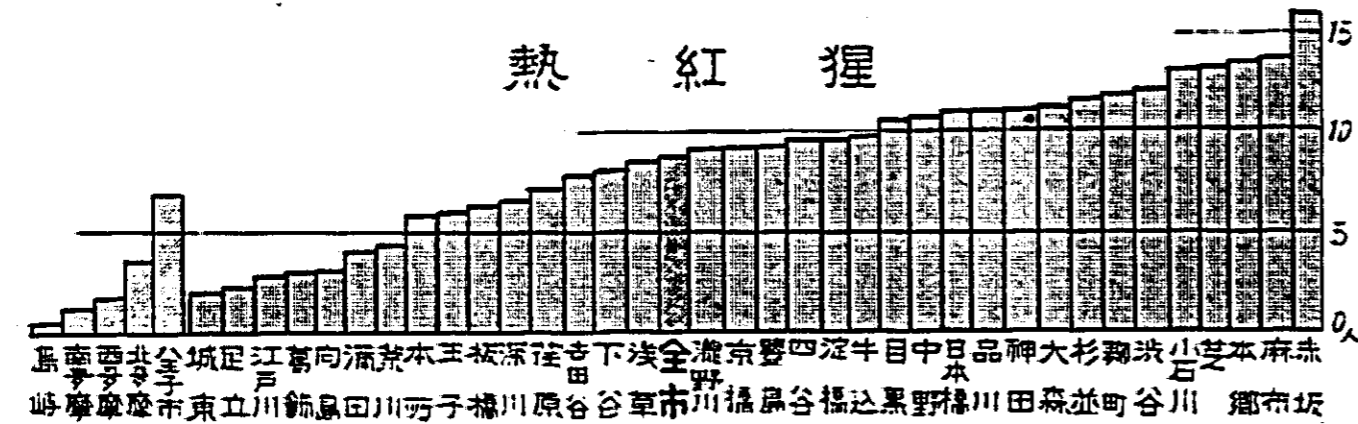
別郡區率生發者患ルス對=萬一口人

(均平間年+五運最)

アリテフチ

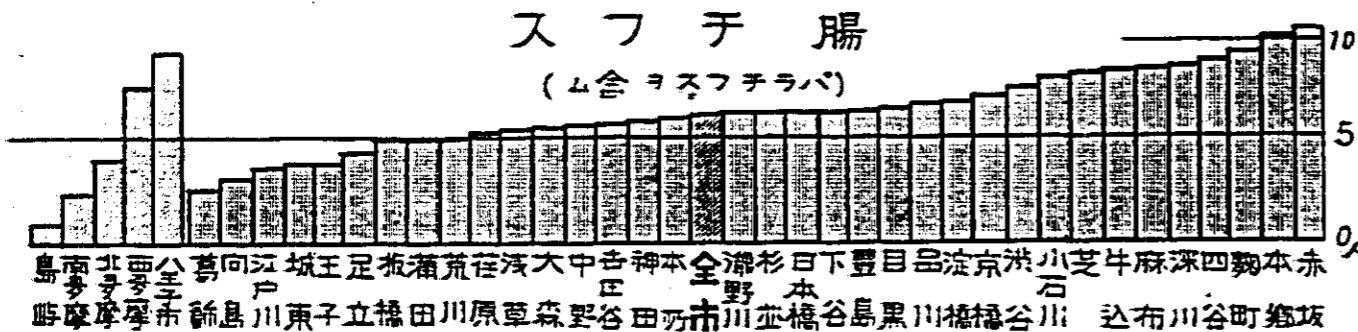


熱紅猩



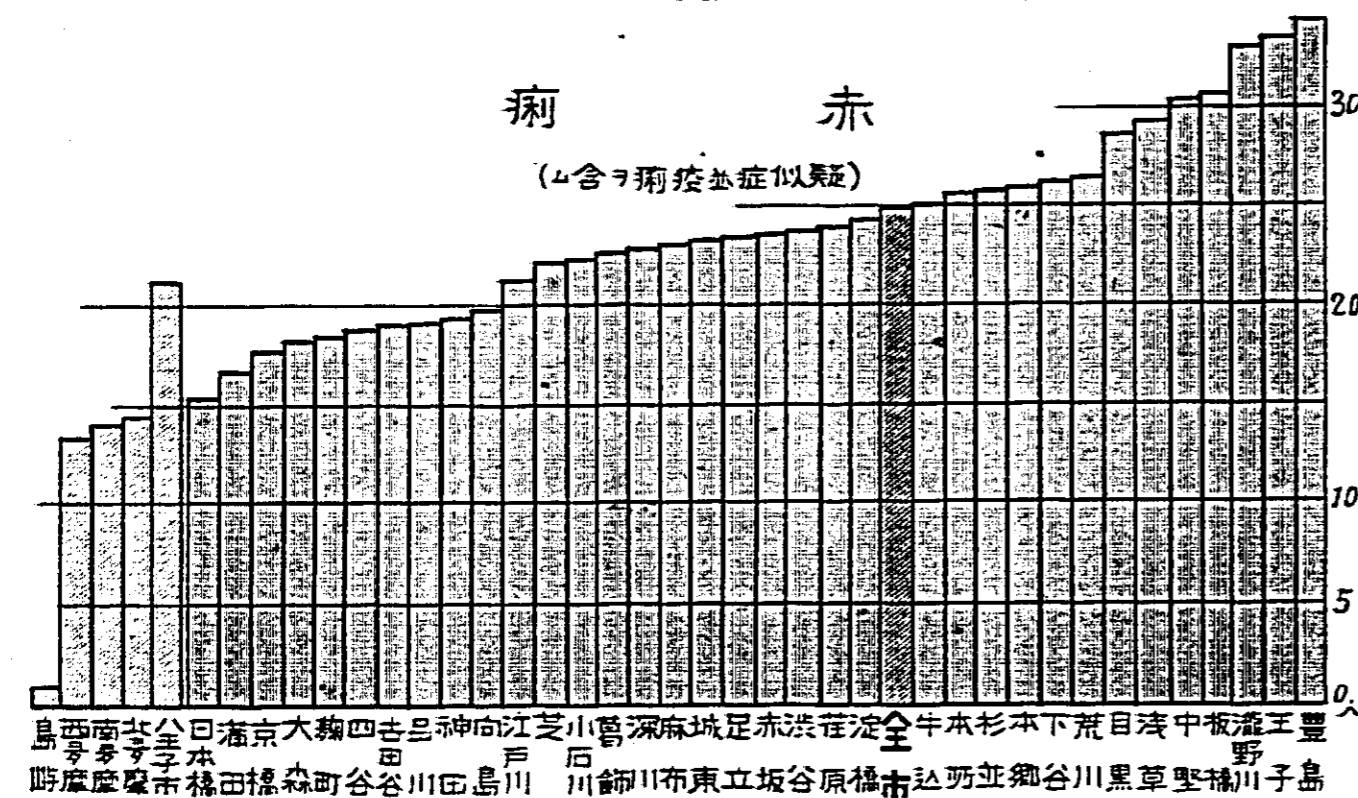
入フチ腸

(ム含ヲスフチラバ)



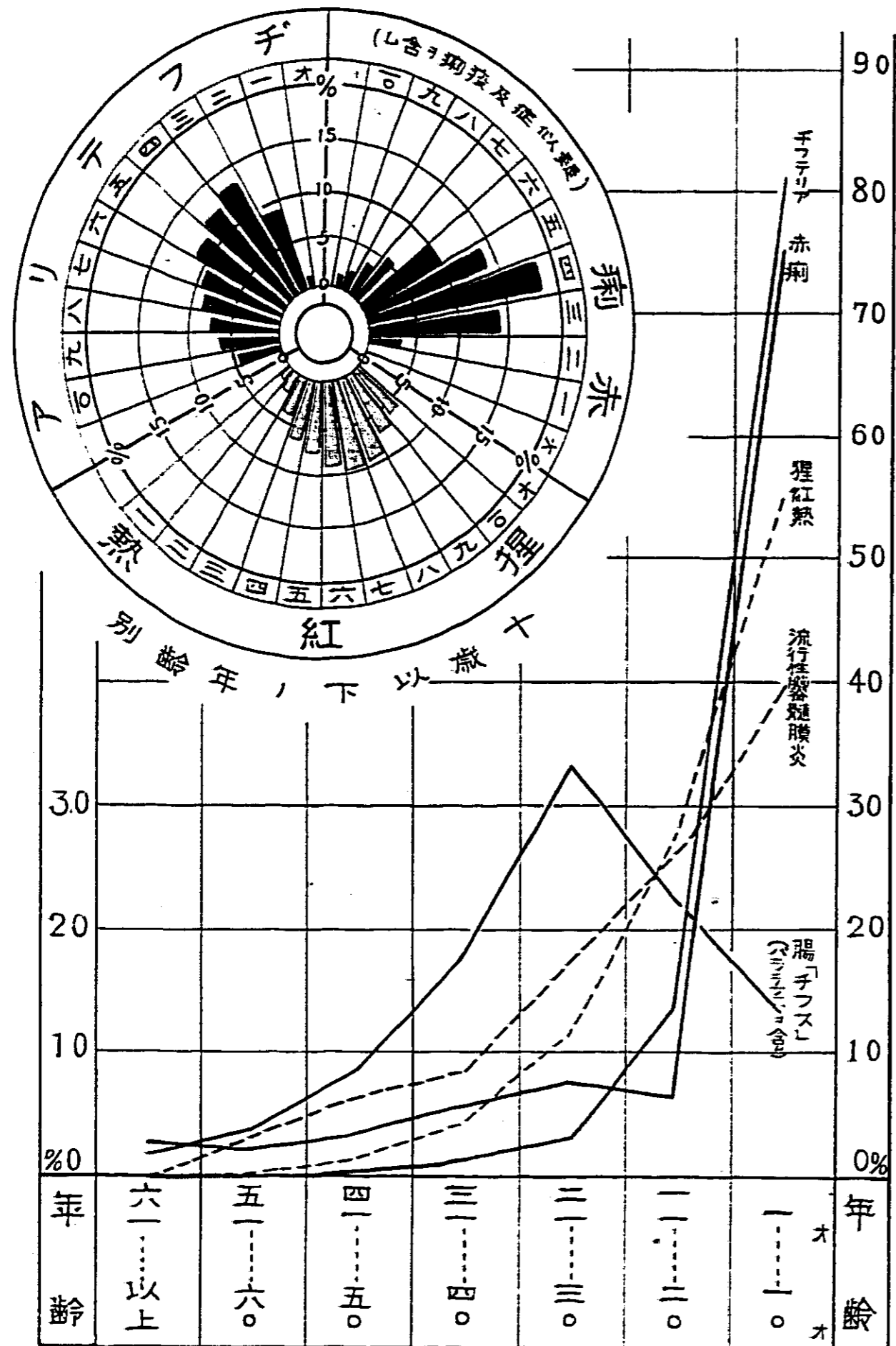
痢赤

(ム含ヲ痢疾並症似疑)

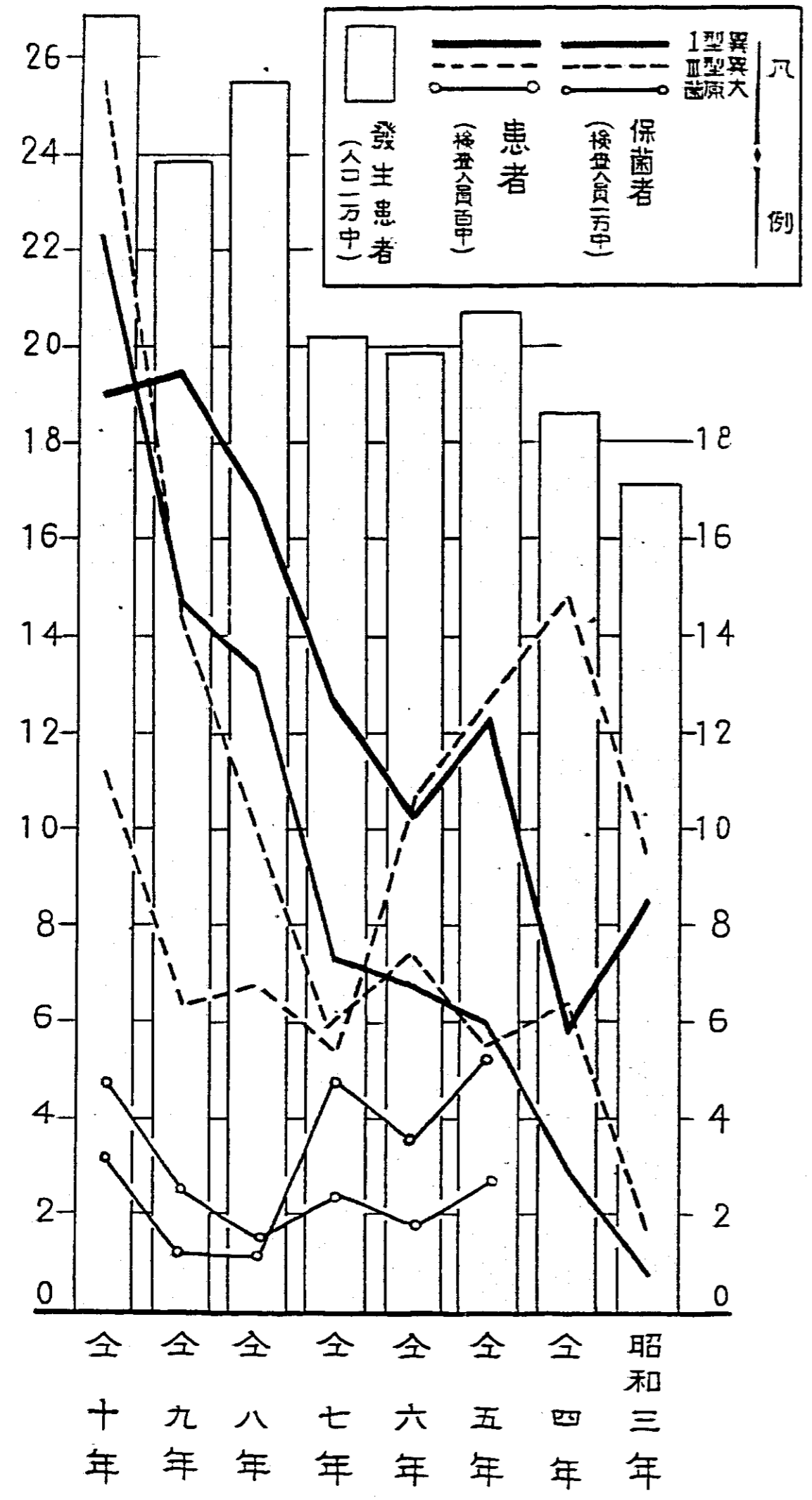


別齡年者患間年五近最

中百者患総病各



赤痢菌、分布變遷



赤痢ノ流行狀況

第二節 赤痢

(疫痢及疑似症ヲ含ム)

一、一般狀況

管下ニ於ケル本病患者ハ、昭和元年迄ハ疑似症ヲ合算シテ毎年三千名内外ニ止マリシガ、昭和二年ニハ六千名、三年ハ八千名、四年ハ九千名、五年ニハ遂ニ一萬一千名ニ達シ、六年及七年亦其ノ梢性ヲ持シタルガ、超ヘテ八年ニハ更ニ飛躍シテ一萬五千ヲ突破シ、昨九年ハ一萬四千五百餘名ニ止マリタリ、然ルニ本年ハ年頭ノ頃、隣接川崎市ニ於テ其ノ東南半市ヲ一舉ニ席捲シテ千三百二十二名ノ患者ト別ニ八百四十一名ノ保菌者ヲ爆發シタル未曾有ノ大流行アリテ、管下ニモ夫ノ飛沫影響ヲ受ケ新年勿々ヨリ患者多發ノ兆アリ、又日本針布會社工場ニ於テ職員職工二百二十人中ヨリ八十名ノ患者ヲ出シタルヲ最多トシ、十名内外ノ小爆發的發生頻出シ遂ニ患者總數一萬六千九百五十七名(疑似症二、一五五名ヲ含ム)ノ驚異的記録ヲ畫シ、其ノ人口萬對比ハ二六・八七ノ高率ニ上レリ。斯ノ如キ患者多發ノ狀勢ヲ惹起スルニ至レル、主因ニ就テ探究考察スルニ、内因的ニハ病原菌株間ニ執拗ナル盛衰變遷アリ、外因トシテハ住民ノ衛生思想向上乃至世相ノ影響ニ依リ患者屈出ヲ著シク促進シタル事實アリテ、此二大因子ノ相重疊シタルニ理由スルモノト觀測シ得ラル。

内因

最近八年間ニ開業醫師及警察署検査醫ヨリ、赤痢菌検出ノ目的ヲ以テ當廳細菌検査所ニ送付シ來
 レル所謂注意患者ノ尿ヨリ検出シタル菌、並防疫施設トシテ年々施行セル健康者ノ保菌者検索ニ
 依リ(第七節十三參照)發見シタルモノニ就テ、其ノ菌株ノ分布消長ヲ觀ルニ次表ノ如ク、此ノ期
 間ヲ通ジテ本型菌ヲ檢出シタルハ陽性五千七百八十六件中ニ於テ僅二件アリシノミナリ。
 而シテ昭和四年ヨリ六年迄ノ發病者ハ、異型Ⅲニ因ルモノ最モ多カリシモ昭和七年ヨリ九年ニ亘
 リテハ急ニ衰頽シテ半減ノ状態ニ下レリ、然ルニ之ニ反シテ異型Ⅰ菌ニ因ル發病者ハ昭和五年以
 來擡頭シ遂ニⅢ菌ニ代リテ愈々其ノ病原性ヲ發揚シツツアリシガ、突如本年ニ及ビテ予ヲ停メタ
 ル感アリ、恰カモ之ト呼應シタルカノ如ク偶々沈靜ノ狀ヲ示シ居タル前掲Ⅲ菌復又本年反騰ヲ見
 ルニ至リテ此兩者ハ宛然「シーソー」競技狀ヲ呈セリ、本年ハ之ニ加フルニ大原菌ニ依ル發病者モ
 増加スルアリ、斯ノ如ク三者擧ツテ其ノ病原性ヲ振ヒタルコトハ畢竟本年ノ患者數ヲ高メタル所
 以タルベシ。

次デ健康保菌者ノ動向ヲ考察スルニ人口(檢案人員ノ意以下同斷)一萬中異型Ⅰ菌保有者ノ介在率
 ニ於テハ僅ニ〇・九一ニ過ギザリシガ爾來上昇ノ一路ヲ辿リテ本年ハ遂ニ二二・一六ニ達シ、其ノ
 曲線圖ハ恰モ管下一般赤痢患者數ノ示向線ト概ネ同様ノ趨向ヲ辿レリ。亦異型Ⅲ菌保有者ハ昭和
 三年ニ於テハ萬分ノ一・九〇ナリシガ中途多少ノ迂餘曲折アリシモ概ネ異型Ⅰト伯仲ノ間ニ上昇

シテ本年ハ遂ニ二五・六九ニ昂騰セリ。尙大原菌ノ保有者モ昭和五年ニハ萬分ノ五・一七ナリシ
 ガ、其ノ後漸減ノ狀アリシニ本年ハ突如反騰シテ萬人中三・四一ノ陽性率ヲ發セリ、此三者合計
 ニ於テハ昭和三年頃ハ健康者一萬人中二・八一ノ保菌者ヲ介在スルニ過ギザリシモノガ、其ノ分
 布ヲ急進的ニ増大シテ遂ニ本年ハ一萬人中五〇・八六即チ十八倍ノ分布増加ヲ示セリ、要スルニ
 右ハ異型Ⅰ菌保有者及同Ⅲ菌保有者ノ分布密度ヲ増大シタルニ由ル處ニシテ、今ヤ該菌ノ瀰蔓浸
 淫實ニ怖ルベキ状態ニアリ、但シ發病者ニ於ケルモノト綜合考察スレバ、夫々菌株ノ病原トシテ
 ノ發揚力ハ菌ノ蔓延力ニ比シ不活潑ナルヤウ省察セララル。(圖譜參照)

自昭和三年至昭和十年間赤痢ノ疑アリシ患者ヨリ檢出シタル菌ノ菌型表

昭和 三 年	昭和 四 年	昭和 五 年	昭和 六 年	昭和 七 年	昭和 八 年	昭和 九 年	昭和 十 年	陽性		菌型			
								陽性數	百分比	異型Ⅰ菌	異型Ⅲ菌	大原菌	本型菌
人員	陽性數	百分比	陽性數	檢出率	陽性數	檢出率	陽性數	檢出率	陽性數	檢出率	陽性數	檢出率	
一、九二五	三三七	一七・六〇	一五九	八・三〇	一七六	九・三〇	一	—	—	—	—	—	
二、九三三	六〇五	二〇・九八	一六七	五・六六	一四八	一五・八三	—	—	—	—	—	—	
二、五七七	七〇五	二七・五八	三三六	一三・二六	三三三	一三・五〇	—	—	—	—	—	—	
三、一七三	七二二	二二・五八	三三三	一〇・五〇	三三三	一〇・五〇	—	—	—	—	—	—	
三、四四六	七〇五	二〇・四六	三三三	一〇・五〇	三三三	一〇・五〇	—	—	—	—	—	—	
二、八八二	七三二	二五・四二	四一九	一五・六二	四一九	一五・六二	—	—	—	—	—	—	
二、八六六	八二二	二八・〇二	四八七	一六・八四	四八七	一六・八四	—	—	—	—	—	—	
三、四四六	一、一七六	三三・八〇	五五八	一六・四〇	一八六	五・四四	—	—	—	—	—	—	
三、四四六	一、一七六	三三・八〇	六四八	一八・八七	三七九	一〇・四〇	—	—	—	—	—	—	

自昭和三年至昭和十年間健康者ヨリ檢出シタル赤痢菌ノ菌型表

昭和三年 昭和四年 昭和五年 昭和六年 昭和七年 昭和八年 昭和九年 昭和十年	検査人員	陽性數	陽性 百分比	内				大原菌		本型菌	
				陽性數	檢出率	陽性數	檢出率	陽性數	檢出率	陽性數	檢出率
同	二八四、八三三	八〇	二・八	三六	〇・一三	四四	一・五〇	—	—	—	—
同	三三三、三三七	二〇〇	六〇・三	三〇〇	九〇・〇	一四一	四二・三	—	—	—	—
同	二五五、六六四	四八	一八・九	五九	二三・〇	一四四	五・六四	—	—	—	—
同	三三三、九七一	四七	一四・三	一七一	五二・四	一四三	四二・八	—	—	—	—
同	二八六、八六四	四〇	一三・九	一七一	五九・七	一四三	五〇・〇	—	—	—	—
同	二五五、〇〇〇	六三	二四・七	三九	一五・三	一四三	五・六四	—	—	—	—
同	二七三、七三五	八八	三二・一	四〇	一四・六	三八八	一四・三	—	—	—	—
同	二八一、三三四	一、四三三	五〇・八	六四	二四・一	七三三	二五・九	九六	三・四	—	—

備考 第七節十三乙號表ニ於ケル發見保菌者數ニハ當初注意患者トシテ供檢シタルモノ其ノ決定時ニハ既ニ恢復シテ症狀ヲ認メザル爲ニ保菌者トシタルモノヲ含メルニ依リ本表ノ數ト合致セズ

外因

東京市ニ於テハ關東大震災後、着々傳染病院ヲ近代式ニ改築セラレ今ヤ收容診療ノ設備間然スルトコロナキ六大病院(外ニ綜合病院ニシテ隔離室ヲ有スルモノ三院、又管下八王子市ニ傳染病院一院、郡部ニ町村組合立二院アリ)ヲ有シテ、克ク府民ノ信頼心ヲ收攬スルニ至レリ、而シテ他

面ニ當部並東京市當局ニ於テハ別項ノ如ク講習、講演、映畫等ニ依リテ民衆ニ對シ豫防警戒心ノ喚起啓發ニ努メ居レルコト、之ニ呼應スルニ府民ハ連年ノ産業不振ニ因リテ生活資力逼迫ノ結果病人發生ノ場合ニハ、逸早ク之ヲ公立ノ如キ病院ニ倚賴シテ輕費ニ且亦家庭ニ置ケルヨリモ安易ニ完全ニ加療セントスル氣風ヲ馴致シテ著シク届出ヲ促進シタル影響甚ダ大ナリ。

近來本病疑ノ患者發生スルヤ開業醫家ニ相談ナク、患者ヲ連レテ直接傳染病院ニ駆込ム者相踵ゲル事實アリ、又患者ノ死亡率著シク低下ノ狀アルコト等ハ如何ニ届出ノ促進セルヤヲ想像シ得ル資料タルベシ。

管下ニ於テ近來赤痢疫病患者ヲ著シク多發セルコトハ、畢竟前述二大因子ノ合流セル結果ニ外ナラズ、現ニ赤痢菌ノ浸淫殆ト治キ状態ニアリトセラル、大東京ニ於テ赤痢患死者ノ大部ヲ占メツ、アル小兒ノ死亡率ニ就テ檢討スルニ、從前腸「カタル」其ノ他ノ病名ニテ模糊ノ裡ニ取扱ハレツ、アリシ程度ノモノガ近來ハ、赤痢ト決定セラル、コト甚ダ多キモノ、如ク、近年ノ赤痢菌ノ猖獗状態ヲ清算シテ猶且是等類症疾患ニ因ル小兒ノ死亡率ハ寧ロ減少ノ傾向アリ。

今之ヲ立證スル爲ニ、一般死亡統計ヲ資料トシ十歳以下ノ死亡者ニ就キ赤痢疫病ト鑑別ヲ誤ラレ易キ消化不良、腸胃「カタル」、乳兒脚氣及腦膜炎ノ死亡數ト本病ト診定サレタル死亡數トノ動向ヲ觀ルニ左表ノ如ク、赤痢疫病ノ病名ヲ冠スル死亡數ハ其ノ母體タル患者數ニ殆ト追從スルコトナク三